



平成30年11月30日(金)

# 藤 棚

第360号

狭山ヶ丘学園 学校通信

<http://www.sayamagaoka-h.ed.jp/>  
<http://www.sayamagaoka-h.ed.jp/js/>

## 眉を横たえて冷ややかに対す 千夫の指

校長 小川義男

清国は満州民族に支配された国家であった。これから漢民族の自立を目指す戦いは、実に輝かしいものであった。その過程で出現した人物達は、実に宝石のごとくキラキラしていた。

1949年に、チャイナ(私は尊敬をこめて支那と呼ぶのだが)は、社会主義革命を起こす。そのプロセスに対する批判も、ここには書かない。

但し、その歴史には素晴らしい人物もいた。

一人は、周恩来総理である。総理と言っても、当時は独裁者毛沢東に絶対的権力があったから、周恩来総理は、あくまでも No.2 に終始しなければならなかった。彼は癌であったが、責務の重さを理由に、毛は、手術を許さなかった。田中角栄からヤクルトの話聞いたとき、周恩来の目は輝いたという。田中のことだから、当然ヤクルトを大量に定期的に届けたことだろう。しかし、周総理はやがて病死する。

彼について、長く書く事はできぬがその肖像は、校内のどこかに掲げようと思う。本当に素敵な、魅力的な人物であった。鄧小平と共にフランス留学の経験を持っている。もう一人は魯迅である。

眉を横たえて 冷ややかに対す 千夫の指  
首を俯して 甘んじて為る 孺子の牛

彼の思想も凄かったが、その肖像も、男が惚れ惚れするような美男子である。中華民族には、このように偉大な思想家が存在した。魯迅は、時の権力の弾圧を逃れて我が国に亡命していたことがある。彼の肖像も、是非揃えたい。

何を言われても、信念に背くことは断じてしない。しかし、民衆が求めることならば、甘んじて、牛のごとくに、その指示に従う。漢文でなければ、これほど簡にして要を得た表現はできないのではないか。

もうひとつ、次のような言葉がある。

得意 冷然

失意 泰然

諸君には、読んで字のごとく、その意を解することができようが、大学の合否が発表される頃、勝者にも敗者にも、じっくりと味わって貰いたい言葉である。分からぬ所は、国語の先生に教えて頂くと良い。

この言葉は、卒業式が終わる頃まで、垂れ幕に掲示する予定である。

## 遠くまで行こう!!

「札幌農学校」(現 北大)にはクラーク先生が着任されていた。10 ヶ月の後、先生はアメリカへ帰らなければならない。函館から出る船で、お帰りになる。当時のことだから交通手段は馬のみである。学生達は、農場の馬で、先生を見送りに行った。函館はとても無理なので、島松で茶店により、ここでお別れすることになった。

今生の別れである。互いに、どれほど名残惜しかった事だろう。

馬に跨がりクラーク先生は、馬にひと鞭当てた。その際、先生は、何か叫ばれたようだったのである。英語でもあるし、はっきりとは分からなかった。先生の姿が見えなくなった頃、学生達は、あれは、**Be ambitious! boys** と叫ばれたのではないかということで、意見が一致した。

特に狭山ヶ丘の場合、一番大切なのは、大きな志を抱く事である。私も

**Be ambitious! Ladies and Gentlemen!** と呼びかけたところである。

しかしこれは、北大からの借り物である。そこで私は、二十年ほど前に、「遠くまで行こう」と呼びかけたのだ。

しかし、この頃の生徒諸君には、この **Ambition** が不足しているように思う。志望大学も、そこそこの所で満足するという小市民イデオロギーが蔓延してきた。

若者が、そんなことでよいのか。「**MARCH** を達成できたら自分は満足」というような「堅実主義」を私は小市民イデオロギーと呼ぶのである。

東大はおろか、早稲田 慶應 上智でさえ敬遠するというのでは、あまりにも無念だ。そんな人物を、果たして若者と言えるのか。

本校では、かつて亜細亜大学に三人の指定枠があったが、一般受験で、この大学入試に合格できる人物はいなかった。その頃私は、「遠くまで行こう!」と叫び続けたのである。翌年、上智と立教に一人ずつの合格者が出た。それは全校に衝撃波となって広がった。あの二人は、何と勇気のある人物だったであろうか。「僕たちにもできるのだ!」この合い言葉の下に、今日の狭山ヶ丘は築かれたのである。

しかるに、百倍も有利な環境にある君たちが、「**MARCH** で満足」などと言うことで、何とするか!

志を高く持て! 困難を恐れるな! 我々は、もっともっと遠くまで行かなければならないのだ。苦勞を恐れず、敗北を恐れず、遠くまで行こう!!!

